呉 勝浩／咲くやこの花インタビューvol.34

呉 勝浩(ご・かつひろ)【令和3年度 文芸その他部門［小説］】

受賞インタビューの当日、いまの気持ちを訊ねると「停滞ですね……」と予想に反して曇り顔の作家、呉勝浩さん。聞けば執筆中の新作ではこれまでにない分野に挑戦しているとのこと。停滞の理由は受賞のそれではなく、創作における“産みの苦しみ”によるものでした。「まさかこんなことになろうとは」と漏らしつつも、そこは作家生活まもなく7年目に入る呉さん、気持ちの切り替えはお手のものです。創作の楽しさに目覚めた原体験から絶賛悶絶中の新作についてのお話まで、すぐにでも机に向かいたい気持ちを抑えながら（？）朗らかに答えてくれました。

◎取材・文・撮影：石橋法子

幼稚園のころ姉貴と遊んだ“ガン消しごっこ”で物語が好きになりました。

過去のインタビューでは「寝たいとき寝て、起きたいときに起きる」とも話されていました。

仕事が上手くいっていれば完全にそうですね。書き物が上手くいっていることが、自己証明みたいなものなので、上手くいってないときは本当に何をしているんだろうって気持ちになります。面倒くさいことはしたくないという思いもあって物書きとかになったんですけど、結局ちゃんとやれている人っていうのは勤勉なひと。一日のタイムスケジュールを決めている人は多いですね。話を聞くたびに「本当かな？」と思うくらい結

構みなさんちゃんとしていますね。

そういう呉さんも、小説誌「小説現代」3月号に掲載された長編『爆弾』が話題です。紙面では大人気メディア QuizKnock（クイズノック）メンバーの河村・拓哉さん、須貝駿貴さんと初コラボ。お二人が『爆弾』と謎解きの魅力について語ったページもあり情報解禁後、数十分でネット書店の予約枠が完売したとか。

担当さんからも「過去最高の初速で売れています」と連絡がありました。クイズノックさんて凄いんですね。僕全然知らなくて作中に「ユーチューバー調子乗ってる」とか書いちゃったんですけど、発売時にはカットされているかもしれない（笑）。

改めまして「咲くやこの花賞」受賞おめでとうございます。

ありがとうございます。賞は世の中とのある意味架け橋、作品を届ける力にもなってくれるので非常にありがたいです。自分の中で良かったというのはもちろん、周りの見る目が多少変わりますよね。ノミネートされることを繰り返していると、やっぱりこいつの作品を読んでおくかという気持ちになってくれると思います。

物語に関しては、小学生の頃からオリジナルを創作されていたそうですね。

一番最初は幼稚園ぐらいにやっていた人形遊びですね。当時はガン消しといって、兄貴がガンダムの消しゴムが好きだったので、すごいたくさん家にあったんですよ。それを借りて姉貴をむりやり“ガン消しごっこ”に引き込んで、即興で物語を作って遊んでいました。ガン消しのキャラクターにそれぞれ性格付けをして。姉貴もバカな事はやめろと言わずに遊びに付き合ってくれた。そこからどっぷり物語が好きになったのかなと思います。

小学生の頃は漫画『週刊少年ジャンプ』などが創作のヒントに。

あと姉貴の影響で『りぼん』も読んでいました。「ハンサムな彼女」「こいつら 100%伝説」「いちご金時れもん味」とか結構インパクトのあるタイトルが多かったですよね。その後、小説や映画にも出合っていくんですけど。

大学卒業後は就職の道を選ばず、非正規、アルバイト、パートとさまざまな雇用形態で働かれました。

本当にろくでもない生活をしていた時期もりましたね。今からやれと言われたら正直それはもういいってなりますけど。でも僕に関しては、若い頃に苦労しておいて良かったって思います。必ず必要なプロセスだったと自分では思うので。狭い範囲でも世の中がどういう仕組みで動いているのか、会社における力関係が分かったり。本当にこういうクソみたいなやつがいるんだということが知れたので。

実感がすごいです。

物書きになると出会わなくなるんですよね、本当に心をかき乱されるようなムカつくやつって。でも仕事をしていた頃は結構いましたから。

どこかに帰属すると、そこでの立場が生まれて。

奪われたらもう路頭に迷うという、首根っこを掴まれているというかね会社に。だから変な上司に当たったらおしまいみたいな。それだけで仕事がつまらなくなるし、ストレスもたまっちゃう。今すぐ改善して欲しいと本当に思うんですけど、でも避けられない部分というのは世の中にはどうしてもあるだろうと。その辛さ、苛立ちみたいなものをやっぱり経験しておいて良かったなと思います。特に物書きっていうのは、色んな人

生をでっち上げながらやっていくわけですから、その人の行動原理のどこかしらは自分の中にあるのが望ましいんじゃないかなと個人的には思います。

自分が悪人側に立っていたかもしれないという思いは物書きとしての根柢にある。

どん底生活は 20 代という若さも手伝って乗り越えられた。

大学出て初めて住み始めたのが東成のちょっと怪しい九龍城みたいな建物なんですけど、部屋の 80%がベッドみたいな。もう二度と戻りたくないなと思いますよね。本当に部屋に色んなものが出たんですけど。最初はギャーとかいってたのが、そのうち何の驚きもなくなっていく。人間マヒして順応していくんだなと。それは逞しいとも言えるし、恐ろしいことだなと思いました。かろうじて僕は臆病なので、人さまに迷惑をかけることはやらなかったし、できなかった。でも一番最悪の時に、一番優しい顔をして悪人が近づいてきた時に、果たして自分がそれを拒否できたかと考えると、あの時の僕は無理だったかもしれないってやっぱり思うんです。それは物書きをするうえで結構根底にある感じです。自分が悪人と言われる側に立っていても全然不思議じゃなかったなと。経験するのが良いことなのか分からないですけど、自分としてはそういう経験を活かして何かを書いているんじゃないかなと思います。

「誰にでもありうる」中で、作品を書く上で大事にされていることは？

ありうる上でどうやって踏みとどまるのかは、ひとつテーマにあります。踏みとどまらないならないで、その物語的な良さというか、何か自分なりに価値があることが書けるかというのはまた別としてあると思うですけど。やっぱり一番コアの中のテーマとしてはよこしまな衝動を抱えている人間がどうやって踏みとどまって、その行為を肯定できるかみたいな話は、いつか書けたらいいなと思っています。

そういう境遇にある人を救いたい理解したい、どんな思いから？

そこまではないですね。それは結構危険だし、難しいところです。ただその人物の視点で物語を書く事で何かちょっと思考するきっかけになってくれたらいいなと。一義的には「面白い！」と言って貰うことが当然一番なんですけど。僕の中では「これどういうことなんだろう？」と考えることも面白いに入っているので、ややこしい。自分にとっての面白いが多くの読者にとっての面白いとは限らんというのは、さすがに7年とかやってたら分かって来るんですけど。でも究極的には（書くことは）趣味なので、自分なりに今ぐらいのペースで仕事が続けられたらいいなという感じではやっていますね。

デビュー前の創作に対する理解者などはいましたか？

直接小説に対してアドバイスをくれる人はゼロに近いですね。ただ芸大時代の先輩で今も演出をされている方がいて、彼とは今も頻繁に飲みに行ったり、彼が作る映画を手伝ったりしています。

その彼というのが、映像創作チーム gomaora（ゴマオラ）の石川幸典さんです。「Osaka 48 Hour Film Project 2020」においてグランプリを獲得した作品『House of Souls（魂の場所）』が、国際的な映画祭「Filmapalooza2021」に出品され、準グランプリと監督賞を受賞し、世界三大映画祭のひとつカンヌ国際映画祭で上映されたそうですね。石川さんは監督賞にも輝きました。

僕は撮影には参加しないんですが、彼の監督作品に企画段階から参加してシナリオの土台みたいなものを書くというのをほぼ 10 年間ずっとやってきました。石川さんはフリーの演出家という肩書でいろんな仕事をされていて、そういう人が身近にいると良くも悪く「もこういう生き方でも生きていけるんだな」と勘違いしてしまった。

先輩として、ちょうど2、3歩先を歩かれていた。

石川さんは、結局自分がデビューする前から何の実績もない自分の意見を取り入れてくれた。それはある種の自己肯定感にも繋がって、創作を続けられたと言うのもあったと思います。石川さんには一番影響を受けた、大げさにいえば師匠に近いですね。デビューが決まった江戸川乱歩賞受賞の時も、連絡を貰った翌日に東京で記者会見があるんですけど、ちょうど給料日前で財布に 3 千円しか入ってなくて。夜行バスにも乗れないから石川さんにお金を借りて、着て行く服もなかったのでジャケットも借りて。その後「お前が着て写真とか撮られているから、そのジャケットもういらんわ」と、本当に頭があがならいですね。

また、デビュー前に勤めていた会社の同僚の思わぬ一言も転機になったとか。

小説書いてるんですと話していた方がいて、「あなたは面白い人だからなんかものになると思うよ」と。そこからですよね意識が変わったのは。要はその人が読んで面白いと思うだろうかと初めて「読者」を想定したのがその時で。それまでは常に読者は自分で、自分が面白いと思うものを書くということにあまり迷いがなかった。このままではマズイと、ようやく気付いたんですね。

同時に横山秀夫さんの小説「64」にも刺激を受けられた。

横山さんの作品に触れて、世の中や社会といった地に足の着いたテーマで書いてみようという思いになりました。そこから乱歩賞に引っかかり始めたりして、あれよという間にデビューまで来れたという感じです。

「損得を超えるものはどうやったら成立するのか」についてはいずれ書きたい。

他ジャンルのエンタメへの嫉妬などはありますか。

他ジャンルへの嫉妬はめちゃくちゃありますよね。例えば音楽なら5分とか短時間で問答無用で感情を喚起してくるのは凄いっなって思いますし、映画は音楽があったり、時間の流れをコントロールできたりする。漫画もすごい文化ですよね。ちょっと技術的な話をすると、映画や漫画って視点の切り替えが物凄く早いんですよ。すごくナチュラルに視点を切り替えられる。でも小説は意外とそれが難しい。昔はいわゆる“神の視点”で、同じ一塊の文章の中で色んな人の視点を次々書けたんですけど、今それだと「読みにくい」と言うジャッジを下されて。実際に僕もそう思うので、あるひとりの視点で物語を書いていく。でもそうすると、例えば漫画で言うところの「コンゲーム」みたいなものがすごくやりにくいんですよ。

心の声でのやり取りを書くのが難しいと。

2 人が戦っていて、ひとりは心の中でこう考えて、相手はそれに対してこう考えてみたいな。漫画とかにあるようなスピーディーな心理戦を小説でやろうとすると非常に難しくて。小説だとどちらか片方の内面を明かさないという状態で基本的にはその場面が構成される。漫画とか映画はそこをポンポン、ナチュラルに切り替えられるので、めちゃくちゃ羨ましいなと思います。あと当然絵の力はありますし、非常に観客が親しみを覚える。登場人物や作品と関係を結びやすいですよね。

ひるがえって、小説の良さとは？

小説は細部なり人間の感情とかをじっくり読めるってことですよね。これが時代に合っているかと言われると、合ってないと思うんだけど（笑）。ただ僕はそれも好きだから。まあ絵が描けたら漫画家を、映像の才能があれば映画監督を目指して、小説はもしかしたら最後だったかもしれない。でも今は非常に小説を書く事が楽しいというか、自分がどこまでやれるのかなというをとても興味深くやっていますね。

気になっているテーマ、ずっと温めているテーマなど。

僕はずっと倫理の話に興味があって、倫理をどう取り戻すのか、もしくはどうやって守り踏みとどまるのか。そういう話は自分の中では大きなテーマとしてありますね。そのため主人公たちには必ず破壊衝動やズルさ、弱さなどを背負わせる。結局、倫理っていうのは何の得もないですし、守らない方がはるかに人生は生きやすはずなんです。なのにそれを守りたいと思うのは、なぜなんだろうとか。そこら辺のバランスをどう獲得していけばいいのかというのは、割と根柢にあるテーマですね。ある種経済に対峙するような価値観というか、そういうのが少しは必要なんじゃないというのがあるので。「損得を超えるものはどうやったら成立するのか」については、いずれガッツリやりたいなという気持ちもありますね。

ちなみに、冒頭に出た新作について言える範囲でご紹介いただくと。

これもねー、最初にやろうと思っていたものからだいぶズレちゃったんですけど、恋愛小説をやりたいというのがあったんですよ。俺が恋愛小説を書くって結構面白そうだなと自分では思ったので。やり始めたら初手から違ってたみたいで、一発目の文章からもう恋愛小説ではない。だからちょっとね、うーんみたいな感じにはなってるんですけど。

今こそ「りぼん」の記憶を苦を掘り起こして。

これは本当に偶然だったんですけど、登場人物たちにあだ名のようなものを付けたんですけど、それが本当に僕も忘れてたんですけど、思いっきり少女漫画に出てくるやつと一緒で。気付いたときは「うわー、マジか！」とびっくりして。もうこれはパクリと言われても変えんと言って、今のところはそのままやろうとしてますけど。

すごく愛着のあるキャラクターとして動いてくれそうですね。

いやぁ、全然そんなことはなく。本当に悪戦苦闘しています。

まさか「りぼん」の話に帰結するとは。

いや恐ろしいですね。でもあれは「りぼん」には載ってねえな（笑）。

最後に恒例の質問です。呉さんが名物として「咲くやこの花賞」を贈呈したくなる、大阪の好きなところを教えてください。

人ですね。やっぱり一癖二癖ある人間が多すぎるんですよね。これが楽しくて。僕のように他県から移り住んで来る人も多いじゃないですか。近隣県も多いですし関東、九州、僕みたいに東北から来ているひともいる。でも不思議と時間が経つと、みんな一癖二癖身に着けていく感じがして。それが面倒くさいこともあるんですけど、面白い。やっぱり大阪ならではなんじゃないかなと思います。

【略歴】呉勝浩（ご・かつひろ）
1981 年青森県生まれ。大阪芸術大学映像学科卒業。2015 年『道徳の時間』（受賞当時のペンネームは「檎克比朗」）で第 61 回江戸川乱歩賞を受賞しデビュー。18 年『白い衝動』で第 20 回大藪春彦賞受賞。20 年『スワン』で第 41 回吉川英治文学新人賞、第 73 回日本推理作家協会賞受賞、第 162 回直木三十五賞候補。他の著書に『ライオン・ブルー』『マトリョーシカ・ブラッド』『雛口依子の最低な落下とやけくそキャノンボール』『バッドビート』など。21 年『おれたちの歌をうたえ』で第 165 回直木三十五賞候補。